

序 文

「胃と腸」誌の専門分野である消化管は口腔から肛門に至る長大な管腔であり、多彩な疾病が発生する臓器である。臨床医学においては、病歴、身体所見、検査成績を把握することが基本であるが、消化管疾患は非特異的な症状を契機に診断されることが多い。事実、消化管腫瘍の大部分は無症状のまま診断されており、これはスクリーニング検査の精度が向上したためと考えられている。このように、消化管疾患を診断するためには適切な検査法の選択と、得られた所見や生検結果を正確に分析する能力が要求される。

さらに、消化管疾患においては内視鏡を中心とした治療手技が数多く開発されてきた。中でも、粘膜下層に対する内視鏡的アプローチはこの領域の最近の話題であり、斬新な治療法が次々と開発・報告されている。したがって、新旧治療法の特徴を理解したうえで適切に選択することも消化管専門医の任務と言える。そこで、今回の増刊号は、消化管疾患の形態診断と治療について、古典的手法から最新の手技まで網羅的に取り上げ、簡潔に解説することを目的に企画された。加えて、X線・内視鏡検査所見の解析に必須である解剖学的特徴についても解説している。

消化管には上皮性腫瘍のみならず、非上皮性腫瘍や、過誤腫などの腫瘍性病変が発生する。これらの病変は、遺伝子異常、あるいは慢性炎症などの環境要因を背景に発生し、最終的に一定の病理組織像を呈する限局性病変を形成する。さらに、その一部は生命を脅かすことになる。一方、消化管には原因の明らかな炎症性疾患、あるいは原因不明の難治性炎症性病変、全身疾患の部分症、遺伝性疾患など多種多様な非腫瘍性病変も発生する。これらの生

体内病変をわれわれは肉眼で確認することはできない。しかし、X線・内視鏡検査を含む種々の方法で観察し、その一部、あるいは全体を切除することで病理組織学的診断が得られる。このような診断・治療法をわれわれは日常診療で当然のように用いているが、いずれも先人が熱意と執念をもって築きあげてきたことを忘れてはならない。

本号で取り上げられた診断法や治療手技の大部分は、本邦で開発され普及したものである。ただし、すべてが完璧なevidenceに基づいて確立されたわけではなく、experienceの集積によりその有用性が確認され、広く普及した手技や治療法も少なくない。その代表的なものが拡大内視鏡を用いた診断学、あるいは小腸内視鏡検査法であり、いずれも機器や手技が確立されたのちに、本邦を含む世界の研究者がevidenceを創生した領域である。したがって、本号の内容が先人の偉業を伝えるのみでなく、温故知新として消化管学における臨床研究の契機となる可能性もあろう。

本誌は、近年『図説「胃と腸」所見用語集2017』、『消化管疾患の分類2019—使い方、使われ方』などの解説書を増刊号として発行してきた。繰り返しになるが、本号は診断・治療法における基本的知識と最新情報を網羅的に取り扱い、読者の理解を深めることを目的としている。明快な項目立てとわかりやすい記述は、読者に満足いただけると確信している。美しいX線・内視鏡写真撮影のコツとピットフォール、X線・内視鏡所見の客観的な判断基準、内視鏡治療の適応、手技、偶発症など、手技に関する疑問への解説書として、過去の増刊号とともにお役立ていただきたい。

松本 主之